

<b>Title</b>	宋代における社会文化的雰囲気をつ捉えて：『太平広記・婦人部』の編集を中心に
<b>Author</b>	劉, 静貞 / 山崎, 覚士[翻訳]
<b>Citation</b>	人文研究. 61 卷, p.47-61.
<b>Issue Date</b>	2010-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	栄原永遠男教授：中村圭爾教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

## 宋代における社会文化的雰囲気をつ捉えて —『太平広記・婦人部』の編集を中心に—

劉 静 貞  
(翻訳) 山崎覚士

宋代女性史を再建する前に、我々はまず当時の社会文化的雰囲気に向き合い、宋人がどのような社会文化的雰囲気において女性を記録し、宋人が書きとどめたテキストにおいて何が確固とした歴史的「真相」であり、何が宋人が我々に信じさせたい「表象」なのかを探究せざるを得ない。本稿は宋初に編纂された資料『太平広記・婦人部』をテキストとし、編集者が如何に収集した故事を異なる部類に入れたのかを解明することを試みる。まず、『太平広記・婦人部』を劉向『列女伝』・正史「列女伝」の脈絡に放り込んで、縦軸に女性史におけるその歴史的位づけを探ってみる。また、類例の配列という女性に対する再分類を通して、編集者が読者に伝えようとした思想文化概念は何であろうかを考察してみる。このような考察を通して、宋代女性史の可能的なアプローチを提示すると同時に、宋人が女性をライティングした時に置かれていた社会的文化的雰囲気を描き出した。

キーワード：宋代社会、歴史の記述、列女傳、太平広記・婦人部

### 一. 歴史はどこに？

歴史研究にとって、資料こそは全ての根源であり、資料がなければ歴史もない。ただし、歴史上の人物が持つ心の声が称揚されたり、埋没させられたりするその理由は、人々が文字・ことば・画像等の筆写道具を使って過去の人物や出来事を記録或いは筆写する時に、最初からすでに人によって関心の重点が異なるために、異なった視角から各種各様の故事を書き留めるからである。このような故事は時代の変遷に随って、再び収集／統合／選択／筆写を経て、最後に我々の眼にする歴史となった時、その過程に加わり、その中で行動した全ての人間もまた、すでに彼ら自身の関心や認識に従って閲読／筆写する角度を調整するのである。我々が閲読できるのは、結局、最初に伝聞された歴史／故事ではなく、伝聞される過程で人々が認識した歴史／故事ともある程度異なっているのである。

実際に、たとえ資料が存在したとしても同一の歴史を語るとは限らない。異なる学者が宋代を描くような場合にも、それぞれの重点に従って、宋代をまったく異なる風景にスケッチする。錢穆『国史大綱』で語られる積貧積弱の宋代も、フェアバンク (J. K. Fairbank) の筆下ではむしろ中国史上もっともよい時代と誉められている (*China: A New History*, chap. 4:

China's Greatest Age)。この東西の歴史家は思考の重点が異なるために、一人は政治外交に着眼し、一人は経済文化より立論しているが、選択した人・出来事の資料が全く同じというわけではないけれども、析出した歴史の脈絡も截然と異なり、当然ながらほとんど両極に位置する後世の評価を提示したのである。

このような認識の下で、我々が宋代女性のためにその容貌や輪郭を描こうとする場合、自然とまず見分けることができるのは、手元に収集した宋代女性に関する記録がどのような社会的雰囲気・歴史環境の中であって、今日見るテキストに作成されたかである。また、これらのテキストを作成した人物がどのような心理・理念でもって種々の記録を残したのかを努めて推量することもできる。言い換えれば、宋代女性史を再建する前に、我々はまず当時の社会文化的雰囲気に向き合い、宋人がどのような社会文化的雰囲気において女性を記録し、宋人が書きとどめたテキストにおいて何が確固とした歴史的「真相」であり、何が宋人が我々に信じさせたい「表象」とはなにかを探究せざるを得ない。我々はある種の観念が当時の社会において確固とした普遍性あるいは代表性を持っていたのか、あるいはただの個別・特例であったのかを如何にして証明すべきであろうか。

本稿はこのような考えから出発し、試みとして宋初に編纂された資料『太平広記・婦人部』をテキストとし、宋以前の小説をその内容として編纂された書物が、我々が宋代女性をスケッチしようとするときにどのように利用できるかを考察する。つまり、なぜ宋以前の故事を読み、どのように読もうとしたのかという点から、宋代女性史を研究するアプローチ及び宋人が女性を筆写する時の社会文化的雰囲気を考察する。

## 二、書写と事実間の架け橋

### 1. 稗官野史より成った『太平広記』

勅撰『太平広記』の李昉「進書表」に拠れば、この書の編纂理由は宋太宗の「體は聖啓を周くし、徳は文思に邁れ、群言を博綜し、衆善を遺さず、以為えらく編帙既に廣く、觀覽周くし難し、故に菁莪を采摭し、類例を裁成せしむ」<sup>1)</sup>という言葉であった。謂うところの「群言を博綜し、衆善を遺さず」とは、その実『太平広記』の内容を正に説明しており、経史等の正統な書籍ではなかった。「進書表」以外に根拠とすべき序例がないために、博學な錢鍾書であっても『広記』の名の由来や編集の意図が『広異記』に基づいて文字を省略したか、或いは『卓異記』のように広く「載事」と「貽謀」を兼ねようとしたと推測するにとどまる<sup>2)</sup>。ただ総じて言えば、『太平広記』は正統な経史以外の稗官野史・伝記小説を採録対象として成立した書籍であった。

我々がすでに認めたように、過去そのものは決して一つの記述ではなく事件或いは情勢であるために、どのような記述の仕方も十分に過去の真実を反映するものではなく、したがって我々

が認識する歴史や歴史人物は、過去の真実の再現ではありえず、歴史家が今日の思考方法でもって「解釈」し「論述」した作品なのである<sup>3)</sup>。とするならば、我々はこれまでの限りある歴史叙述から目先を離して、再びあらゆる過去の遺留に目を向けるべきである。というのも、あるレベルについていえば、それらは振り返って過去を窺う機会を提供できるからである。たとえ明らかに学術的実証性に乏しく、風聞によって来た素材でも、それが史料たるに十分な価値や意義を見出すこともできよう。問題の糸口はただ我々がいかに資料の性格を認識し、それがもたらす情報の指し示す範囲を見通し、その中に隠された過去を解釈できるかにある。

このような角度から見れば、たとえ稗官野史・伝記小説を基本的な内容として成立した『太平広記』であっても、それ自身が史料としてのある種の意義を持つはずである。但し、その真に存在するかどうか確証できない記述内容がいかに読まれるべきかは、やはり論証を経る必要がある。

厳密に言うと、『太平広記』が収集した資料の内容は筆記・小説の両者を兼ねており、我々は通常これを筆記小説と連ねて呼ぶが、実際には筆記と小説とは性質が異なる。後者の虚構性のほうが前者に比べて高いが、基本的にはそれらは伝聞から来た記録と見なしてもよいだろう。

このような資料は信用できるだろうか。私が宋代「不孝子」の問題を研究した時に得たものを借用すれば説明できるかもしれない。「不孝子」は宋人が強く関心を持った社会問題であったが、宋人がはっきりと記録した社会問題ではなかった。このために私は怪力乱神に満ちた『夷堅志』などの書籍に見える故事を引き合いに出して論じた。現在の科学的な論証方法でもその真偽を確かめることもできないこうした怪力乱神の話は、根も葉もないものかどうにかかわらず、歴史研究の資料的価値としては、当然その「歴史事件」の真実性にはなく、研究者が書中の作者と読者を夢中にさせる故事を通じて、神鬼のプロットに取り巻く周辺と、当時の现实生活上の問題とが相関・干渉し合う思考・観念を発掘できることにある<sup>4)</sup>。

言い換えると、仕方のないことだが、我々は必ずしも筆記小説中の故事の真偽を証明する必要はない。ただし、故事の詳説や叙述の方法は、むしろ我々に当時の人の生活やその思想観念を認識する新たな道筋を提供しており、その故事内容は誰かの真実の人生ではないかもしれないが、当時の人々が信じた、あるいは怪訝に思った人・出来事であるのである。さらに注意に値するのは以下のことである。これらの伝聞あるいは虚構に属する数多の故事のうち、結局はどれだけが当時の人に遍く語り伝えられ、共通の一般概念となったのか。又、少数の文人による遊びの作品はどれほどであろうか。そのうちどれが奇聞異事と見なされ、またどれが現実の状況と観念の反映であるのか。これらの故事が作者の異同・時間の差異、地域の別に従ってどれほどの落差があるのかないのか。したがって故事そのものが元より強調しようとする特殊性において、何が当時における社会の常態あるいは普遍に属するかを如何に見分けるかは、なお個別の故事について緻密に論証を進める必要がある。

一般的には、系統的な記録方法を取る歴史作品や、筆写の意図や文体書風が明らかで識別し

うる文集作品は言うまでもなく、基本的には作者が代表する社会的評価概念を容易に読み込むことができる。ここからは、彼らの筆下に描述された社会状況が、当時では意識的に経営されたり期待されたりするものなのか、あるいは禁制に遭って廃棄されたものなのかを比較的析出しやすい。だが筆記小説についてはそうではない。筆記小説そのものの分類について見れば、その中に「志怪」・「伝奇」の名を掲げるものもあり、真相を追究したり規範を設けたりする「辯訂」・「箴規」もあり、また純粋な記録である「雜録」・「叢談」もある<sup>5)</sup>。千年後の読者として、見たところ直接的に事の顛末を叙述し、またその思考の位置付けを表明しない故事に直面すれば、時として非常に識別しがたく、その故事が当時の社会で認可されるのは結局どの程度なのだろうか。引いては故事の言い伝えの原始の状況に対して何も分からないために、研究者自身の時代的印象に基づいて、ときに禁じられた行為を誤って称揚すべき先駆とみなし、既存の文化構造を根本的に歪曲してしまうこともある<sup>6)</sup>。

さらに、『太平広記』は李昉等が前代の稗官野史・伝記小説を集成したものである以上、我々はその故事を利用する前に、更に一步進めて、それらが前代の社会背景から出たもので、前人の思想観念が注がれた故事内容であり、その編纂された時代の社会風潮の影響を受けたのちにあって、そのうえで宋代の歴史研究にどのように用いることができるのかを考えなければならない。

## 2. 編纂者の筆写の位相

一般的には、我々が資料テキストから社会文化の情報を解読しようとする時、比較的目に付くのは故事テキストを作成した、習慣的に作者と称される人であり、その時代である。このため一般に『太平広記』の故事を利用する場合、故事一すなわちその引用書の出た時代に依拠して、議論の重心を漢から五代までに置くことが多い。

ただ実際には、テキストが読まれ、テキスト内の知識がいわゆる読者に再び伝達される時、この伝達者はすでに自分の理解に基づいて知識を作り直している。当然ながらこの伝達者が真にテキストを作り直した作者であったかどうかは、なおテキストの伝達ルート上でどのような努力がなされ、或いはどのような影響力があり、ひいてはどのような魅力があって定まったのかを見る必要がある。作者個人の期待・社会規範の要求・国家政策の方向、さらに知識が拠り所とするテキストの外形が刊本か抄本かなどが、筆写と閲読の時に出会い、しかも互いに力比べする。作者によって設定された読者と、作者の予想しなかった読者は、意識と無意識に配置される種々の交流ルートで、各自が持つ自己の脈絡に従ってこの出会いの時に対面するのである<sup>7)</sup>。

『太平広記』に収集された故事はもとよりその材料を宋以前から取っており、もともと故事自身の語り伝えの脈絡があるが、宋太宗の意思によってひとたび李昉等に収集・採録されると、同時に「編帙既に廣く、觀覽周くし難」いのために、特に「菁英を采摭し、類例を裁成」すと

された。これら前代社会に作成された故事の材料は、ただ新たに閲読の順序を並べ直されただけでなく、同時に李昉等のプランに基づき、かつ宋太宗の認可を経て、つまり宋人の構築した知識体系の中へと放り込まれたのである。

事実、宋初に編集された『太平広記』は、その個別の故事がすでにどのような考証・還元過程を経ていようと、それらはすでに編纂者の考えに照らして、新たな分類に放り込まれ、すでに本来の叙事の脈絡から引き離され、したがって新たな概念を導入していた。もともとの故事が結局のところ、どのような組み合わせの脈絡の中で人に読まれたかについては、謎のままなのだ。総じて、資料の保存状況から見ると、すでに作者あるいは写者がもともと資料を提供した原初の状態ではなく、後世の整理・編集を経て、その時の社会文化構造に放り込まれ、混ぜられた後のものなのである<sup>9)</sup>。

このように新たに組み分けられ、新たな閲読の脈絡に配置された故事は、最初の撰述者が持っていた筆写の本意から離れているのであろう。前文で述べたように、筆記小説そのものの分類には「志怪」・「伝奇」の名を掲げるものもあり、また真相を追求したり規範を設ける「辯訂」・「箴規」もあり、さらに純粋な記録の「雑録」・「叢談」もあった。ただこれらの趣旨に応じて書写された故事は、『太平広記』の編者が採用する過程で、もとの意図とまったく異なるか、引いてはそれと背離れた思考分類構造の中に放り込まれているかもしれない。当然ながらその間に、書写理念が継承されてなんら抵触しないこともありうる。

再び注意に値するのは、このような変化が起こるならば、作者・編者と読者双方が選択するかどうかによって発展する相互関係以外に、なお知識と知識媒体（テキストの外在形式）間の相互作用も存在する。私は宋本『列女伝』の編纂と流伝の過程を扱った折、注意したのは以下の事である。当時朝廷が支持するなか、蘇頌の重編を経て曾鞏が校勘した『列女伝』八篇（伝七篇、頌一篇）は、館閣に入蔵されて以後、書海に埋没し、伝世しなかったと見られる。今日のいわゆる覆宋本の原型は、その実、民間に身を処した王回が整理・編成した九篇本（古列女傳七篇、頌一篇、續列女傳一篇）であった。そのカギとなるのは、蘇頌・曾鞏の八篇本が校讎されて以後、わずかに「繕寫に付す」とする点である。この「校寫」であって「校刊」ではないテキスト形式は、テキストが流伝されコピーされる機会にきわめて影響を与えただろう<sup>9)</sup>。

『太平広記』の編纂が完成して後、同じような問題が起こった。というのも当時は鏤版を経たとはいえ、「言者以為えらく後學の急ぐ所にあらず」であったために、ついに「墨版を収めて太清樓に蔵す」とされたからである<sup>10)</sup>。晁公武『郡齋讀書志』によれば、北宋の末年に蔡蕃が『太平広記』を節略して『鹿革事類』・『文類』を編纂した。しかしながら宋人が著した『能改齋漫錄』・『直齋書錄解題』等書の記載を通して見ると、宋人の間で確かにこの書が流伝していた。にもかかわらずこれらの人が読んだのは結局、ある程度の数量を発行した刊本か、それともただ少人数の間で伝写された抄本であり、今のところ定論しがたい<sup>11)</sup>。したがって、書籍流布史の角度から、伝え読んだ者を対象として、その中の故事が宋代の読者によってどの程度

受け入れられたか、あるいはその記述内容と宋代社会の風潮との関連性を推量することはあまり可能なことではない。ゆえに以下ではただ「婦人部」の内容とその分類について考察し、『太平広記』編者の編集理念の淵源をさかのぼり、当時の女性を书写する社会文化を明らかにする。

### 三. 『列女伝』から『婦人部』まで

『太平広記』全500巻は、巻首の神仙より巻末の雑録まで、名目は大類92、小類239を立て、神仙・女仙・道術・方士・異人を全体の幕開けとし、中段を名賢・廉儉で始め、情感・僮僕奴婢で終わる人事名目となっている。その後ろは夢・巫・幻術・妖妄等の神鬼怪物ひいては蠻夷であり、最後に雑伝記・雑録で結ぶ。

このような配置は、当然『太平広記』編纂者が「群言を博綜し、衆善を遺さず」、「菁英を採摭し、類例を裁成」した結果である。彼らは故事を原書編集時の脈絡から取りだして、故事ができる過程に存在した時系列関係を打ち壊した。このような分類編成のやり方や理念について、現在の研究者には神仙・道術・報應等の部類の巻数が特別多いことから立論して、この書が宗教的色彩を鮮明に持つと考える者もいる。しかしまたある研究者は、これらの神仙文化信仰の部類が、人生最高の境地を希求したものであって、したがってその後ろの部類に見えるそれぞれの人生と、人の内在的特性と併せて考慮する必要があったことを発見し、『太平広記』の中になお濃厚な人本文化知性の息吹があることを強調する。その類目の順序（神仙—道術—報應—人生—死亡—再生—物怪）にいたっては、生命・靈異レベルの伏線が流れていることを示し、儒・釈・道を融合しているだけでなく、天上一人間—地下の層次を呈しているという<sup>12)</sup>。

#### 1. 分類上の婦人部の位置

全体の類目の配置から「婦人部」の位置を見ると、人事と関連する大項目の末尾にある。つまり名賢・將帥・豪俠等の人物分類と、廉儉・知人・驍勇・博物・書・畫・卜筮・醫・相、さらに奢侈・詭詐・詭諧・無頼、ひいては輕薄・酷暴等の能力・伎藝・性情の分類の後に、「婦人部」は情感と僮僕奴婢の前に配列され、続いて夢・巫・幻術等の神異・妖鬼・怪物および蠻夷が類別されている。

巻帙に依って言えば、『太平広記』の第二百七十巻から二百七十三巻までが「婦人部」である。その中の「婦人二」・「婦人三」はさらに賢婦・才婦・美婦人・妒婦と題を設けて分類され、「婦人部四」は妓女となっている。しかし、婦人部の第一巻は明人の談愷が補ったものである。中華書局点校本の先に引いた談氏識語には「宋版原と闕く、予考うるに家藏の諸書より十一人を得て之れを補う。其の餘の闕文は尚お他日を俟つ。十山談愷志す」と言い、これに註して「本巻原と闕く、談氏初印本に此の巻有り、未だ出だす所を知らず。後印本撤出し、識語を附増す云云。今初印本の此巻を將て後に附録し、以て参考に資く」と述べている。

談氏が増補した第一巻、あるいは現在各本の『太平広記』に見える「婦人部」の故事<sup>13)</sup>が

信用できるかどうか、ここでは姑くおいておき、試みに現在把握しうるこれらの資料について、各巻の標題と内容とにおける関連性、および「婦人部」の書物全体における分類の位置を考え、ここからある情報を取りだし、編纂者の排列の意図を理解し、進んで背後の社会心態あるいは秩序理念を判読できるだろうか。

まず各巻の標題とその故事の内容を見ると、第一巻が原欠なので、この巻にも標題があったのか確かめるすべがないので、まず「婦人二」から取り掛かる。いわゆる「賢婦」たちの表現は、見識があって、よく諫めることができ、また謀略があって、必ずしも災いを避けえないが、少なくとも正道を行うことができるものと概括することができる。「才婦」は主に詩・文に長けていることとして称賛される。賢婦が夫を諫めて正道を行うのに対し、才婦の大半は詩文をもって夫を動かして改心させている。

「婦人三」の「美婦人」はただ「容貌絶世なり」（「薛靈芸」）、「其の容貌に比べられるもの有るなし」（「石崇婢鬪風」）であっただけでなく、彼女たちの「美」には姿かたちの「善く行歩進退す」（「趙飛燕」）、「玉質柔肌なり」（「蜀甘后」）、「引いては冬に衣を纏わず、夏に體に汗せず」（「浙東舞女」）ということもあった。最も恐ろしいのは「妬婦」であり、その中には、ただ外室の子が家に帰った時に張褐妻が自分を後悔する前に「少年端無し、其の父子の死生とこしえ永に隔たるを致す」という例もあるが<sup>14)</sup>、その他は醜酒を飲んで死ぬことを願っても妬いてしまうもの（「任瓊妻・房玄齡妻」）や、死後でも婢妾を新たに納めた夫を許せないもの（「蜀功臣」）、彼女たちの猛烈な嫉妬によって夫が恐れてあえて家に帰らないもの（「李廷璧妻」）、あるいは刺客を買うのも惜しまないものもある（「秦騎將」）。当然ながらその中に異人の助けを得て、妻の嫉妬心を静める者もいた（「杜蘭香」）。

妓女を標題とする「婦人四」は、妓女の文才を描く以外に、男性間でいかに妓女を奪い合ったかではなく、男性間でどのように妓女を贈りあったかを描いている。

ここから再び「婦人一」の21人の女性に戻ると、最初の譙國夫人洗氏は娘として家にあり、嫁いで婦となっても、部衆を慰撫して地方を安定させることができた<sup>15)</sup>。その他の各人については、再婚を拒絶したり、直接夫に殉じたり、賊人に抵抗して殺されたり、賊人を摘発した後に自殺したりである。「婦人一」にもし標題があるとすれば、「烈婦」ではなかろうか。事実、萬曆年間に蘇州の許自昌が刊行した刻本では、卷二七〇は確かに「烈女」を篇目としている<sup>16)</sup>。

巻目の標題・故事の内容、また巻の序列は言うまでもなく、『太平広記・婦人部』の分類方法は、すべて劉向『列女伝』と『後漢書』以来の正史「列女伝」を連想させる。ならば、『太平広記』との間にどのような関連があるのだろうか？

## 2. 「列女」の類となす所以

『隋書・経籍志』の作者は、劉向作の『列仙』・『列士』・『列女』の伝が「皆な其の志尚しに



困り、率爾して作る」と語っている<sup>17)</sup>。『列仙』・『列士』の人物の「志尚」は当然ながら言うまでもない。我々の眼中にはただ「性別」と同じ扱いに見える「列女」たちであるが、その共通の志向はつまりなんであろうか。

表面的には、劉向『列女伝』の意図は「女行を羅列す」にあり、したがって全体を「母儀」・「賢明」・「仁智」・「貞順」・「節義」・「辯通」・「孽嬖」等の七篇に分けたが、深く検討すると実際に見えてくるのは、真に劉向に肯定された女性は従属的な地位を謹んで守り、よく職分を補佐した人である。そのカギは、彼女たちの諫めが男性に受け入れられるかにあり、故事の末尾には完璧な結末が待っている。

全書の始めに位置する「母儀」・「賢明」の両篇が記載するのは、すなわちその子・その夫が母・妻の戒めを受け入れて成功した男性の母・妻である。もし「仁智伝」中の助けることができない「阿斗」（劉備の子劉禪）たちや、「貞順伝」・「節義伝」中の短命夭折、不孝不義、言語で感化できない男性たちに遇えば、賢明で知恵のある女性が再三注意して戒めても、事理・人情の軽重を理解させることはできなかった。なので、これらの社会的役割や職分を効果的に成し遂げることができなかった女性は、ただ僅かに自分の保全を求めるとか、あるいは身を犠牲にして節に殉じ志を明らかにするしかなかった。言い換えると、女性の成功はその実、関係する男性の成敗によって決まり、女性の再分類の基準は女性自身の智・愚・優・劣がなく、女性がその関係する男性に対して発揮しうる利益の程度によって決まり、その基本原理は儒家社会にあって女性に設けられた「居内・従人」の性別倫理なのであった<sup>18)</sup>。

この「性別」の位置を「志尚」の前提とする分類思考は、実際には古代社会秩序の「礼」制の序列が根底にあり、その前提は父系父権の社会秩序を擁護するという現実の要求に基づいており、ゆえに身は異姓で異性の女性はただ「従」の付属の地位に配列され、「内」の私領域に安置されるのである。「性別」は社会分業と役割身分（名分）を配列する重要な根拠となり、当然人物分類の原則基礎となった。もしその下を再び分類して七類としても、これはただ女性の「志尚」の表現方法が多様であることを意味するだけで、多元であることを意味しない。

劉向『列女伝』が性別倫理に依拠して設定した分類モデルの書写原則は、正史「列女伝」の筆写理念に対して深刻な影響を与えた。正史中もっとも早く列女伝を設けた范曄『後漢書』は、その「列女伝序」において劉向『列女伝』の一文字も掲げないが、『晉書』以降ほぼすべて、正史が「列女伝」を増設したのは、先に劉向『列女伝』があり先例としたためであることを認めている<sup>19)</sup>。

過去の学者は多く、正史が「列女伝」を設けて後、女性に歴史記述中に自己の空間を持たせるようになったと考えているが、しかし、清代史学の大家章學誠が『史記』「不著列女」を反駁して提示した説法は省察する価値がある。

列女を著さず、著さずんばあらざるなり、巴清は貨殖に叙べ、文君は相如に附著し、唐山は之れ藝文に入り、緹縈は之れ刑志に見わる、或いは節或いは孝、或いは學或いは文、磊

落相い望む<sup>20)</sup>。

つまり、司馬遷が列女に立伝しなかったのは、「列伝」の中に婦女たちがそもそもそれぞれの特色によってその部類に託されているからであって、一部類に収まるものではなく、おのずと一部類を単独に設ける必要もなかったのである。

たしかに、『史記』の撰述形式からすると、司馬遷が紀伝体を創ったのは、もとは一君萬民の皇帝制度と同調して、皇帝一人の専制である「本紀」の下に、「列伝」を用いて編戸齊民制度における各種の人物をすべて概括するためであった。したがって人を以て事に繋げる大原則の下、特殊な個人はもとより独立して伝を為し、意気投合し、境遇が同じで、心が通じ合う人々は合わせて伝を立てるか、同類の伝に収められた。

よって、「列女伝」がなくても、「列女」を記載しなかったことを意味しない。逆に「列女伝」を設けたがために、女性に対してある種の差別的待遇を生み出すこととなった。元来、社会全体を著述対象とする紀伝全史が男性に特有の記録空間となったために、女性は「列女伝」内に集められ、社会全体の外に放り出されてしまったのである。男性が異なる個性と境遇によって、異なる「伝」中に様々な相貌を見せるのに対し、女性は結局一部類に帰せられて、社会が女性たちに対して抱いた最も基本的な期待に依拠して、ただ一つの面目で人に示すものとなってしまった<sup>21)</sup>。

さらに一步進めて考える価値のある問題は、歴代正史が「列女」に入れたけれども、章学誠が批判したように、東漢以降、史書が「羅列」の「列」を間違っ、て、「殉烈」の「烈」にしたため、専ら「節烈」の一門を書くようになったのである。章学誠は諷刺的に語り、もし女子が節烈一門を書けば、「其の義例を充たし、男子を史書するに、但だ一伝のみ具うれば足れり」<sup>22)</sup>と述べている。

ならば、結局は何が原因となって、劉向が再分類する中でもっとも彼が重んじた「母儀」・「賢明」の女性が、正史「列女伝」において徐々に消失し、ひいては「専ら節烈一門を書く」という結果になったのであろうか。

### 3. 「列女」より「烈女」へ

范曄はかつて「才行尤も高秀なる者を擧次し、必ずしも専ら一操に在らざるのみ」と述べた。『管書・列女伝』も「一操稱すべし、一藝紀すべし、咸皆な撰録し、之れが傳を為ると云う」<sup>23)</sup>と記す。ただ子細に『後漢書・列女伝』の内容を検討すると、范曄は「必ずしも専ら一操に在らず」と宣言するけれども、その中に記述される女性の品行は基本的に劉向『列女伝』の七分門を超えておらず、当然ながら劉向『列女伝』の「居内・従人」の性別倫理の原則も脱していない。しかもその中で元より夫を諫めて正道に循行することに成功し、「賢明」と称されつつも、事故に遭遇して、ただ生命を投げ打って貞節を保ち義理を守ったという女性の人数が明らかに他に比べ多くなっている。従って再婚し争議を醸した蔡文姫も、自身の文才で伝に入ったかの

ようだが、子細に伝の文章を吟味すれば、彼女は言詞で曹操を動かし、夫を危機から救ったとする表現こそ、范曄が彼女を伝に入れた理由かもしれない。

再び『北史』・『隋書』に話を進めると、両書の作者は、その筆下で多く貞烈の行いを記したのは「婦人の徳」が「溫柔」にあって、溫柔でなければ仁をなしえないが、しかしながら外に現れて「節を立て名を垂れる」ことのできた者は、やはりその「貞烈」の行いに頼っていたからと細心に説明せざるをえなかった<sup>24</sup>。

我々は別の角度からこのような歴史の変化を考えることができるかもしれない。つまり前文で分析したように、劉向が最も重んじた「母儀」・「賢明」類の女性にとって、その成功は実際には関係する男性の成り行きの上に立っていた。しかしながら各正史の記載となると、守身、盡節、孝親、撫孤のどれであっても直接に女性自身の品行に着眼している。

『金史・列女伝序』の作者は実際的な角度から、女性はそもそも「無非無儀を以て賢と為す」であって、「若し乃ち嫠居寡處し、患難顔沛す、是れ皆な婦人の不幸なり」と示している。しかしこのように不幸に遭遇しても「卓然として能く自ら樹立し、烈丈夫の風有り」の女性がようやく歴史に残る機会を持つようになった。このような事実に対して、『遼史』の作者は「天下而して烈女の名有り、幸にあらざるなり」とし、したがって「其れ烈女を得るよりは、賢女を得るに若かず」と述べる。しかし実際には早く『旧唐書』に、すでに女性の「窈窕の操、其れ『賢』ならずや」とする実際的表現が認められ、そこに「白刃に臨みて慷慨し、丹衷を誓いて激發し、粉身顧みず、死を視ること歸するが如し」の節烈の行いも含まれている<sup>25</sup>。

このような認識に基づいて再び『太平広記・婦人部』を顧みると、全体の順序における位置であろうと、その内容自身の再分類であろうと、すべて劉向『列女伝』より正史「列女伝」以来の一脈が受け継がれ、また多少とも変化の痕跡があることを微かではあるが見出すことができる。

前文の分析を通して、我々に想像できるのは、各門類に収められた女性を主人公とし、あるいは女性に関する故事<sup>26</sup>が、人事と関連する類別のほぼ末尾に位置するにも関わらず、独立して「婦人部」を設置している必要性、また『太平広記』の編纂に対して持つ意義である。というのも、これはまさに劉向・范曄等と同様の考え方であり、彼らについて言えば、「性別」が史伝において人物を編纂する重要な分類基準の一つであり、しかもその他の分類に比べより重要な基礎的分類基準であったからである。

「婦人一」が何をもって烈婦を主な内容としたのかについて、正史「列女伝」の「専ら節烈一門を書く」の転換を理解していれば、分かりやすい。根本的原因を追及すると、これはやはり「居内・従人」から出発した性別倫理に依るのであり、女子をいとも容易く「無非無儀を以て賢と為す」の境遇へと陥れてしまう。さらに一層深く考えると、正史「列女伝」はすべて自然とその筆写の焦点を「節烈一門」に集中させており、とすれば「婦人一」が「烈婦」を主たる記述対象とし、必ずしも別に節名を立てなかったのも、本来「婦人」が「性別」倫理に依拠

した最も根本的な表現であったためである。

「婦人二」の「賢婦」は、基本的には相当の見識・謀略があり、努力してよく諫めの責任を尽くしているが、結果的に成功したかどうかはすでに編者の関心ある所ではなかった。言い換えれば、『太平広記』の編集で受け入れられた「賢」婦は、すでに劉向『列女伝』の本義を残すすべもなく、はっきりと「仁智傳」と合流させられた。『旧唐書』の「白刃に臨みて慷慨し、丹衷を誓いて激發し、粉身顧みず、死を視ること歸するが如し」という節烈の行いを、「窈窕の操、其れ賢ならずや」と見なす考え方は、『太平広記』の編集者たちと一致するものであった。

「才婦」はまた別に注目に値する分類であり、『列女伝』『辯通』の「小序」に「惟だ辯通の若きは、文辭従うべし」と述べる。この点について言えば、「才婦」は「辯通」と符合するかのようである。しかし「辯通」の「小序」にはまた「類を連ねて譬を引き、以て禍凶に投ず。一切を推推すれば、後ち復たは重ねず。終に能く心を一にし、意を開くこと甚だ公なり」と説き、ただ「文辭従うべし」の「才婦」たちのみの喩えでもなさそうである。先に示したように、蔡文姬が『後漢書・列女伝』に入っているのは、彼女の文才によるとは限らなかった。しかし、文才に長けた者が正史「列女伝」の脈絡の中であって、伝統中国社会での評価が結局何に基づいて論じているかと言う者もあり、学者が多く解釈を施してきたとはいえ、今に至っても定論しがたい<sup>27)</sup>。我々が再び『列女伝・辯通』に見える、見識が奥深く、文辭に優れた女性、実際にはすべて醜婦であることを想起すると、「才婦」末篇を「孫氏」で結ぶのも、注意すべきところかもしれない。この故事の主な紙幅は孫氏が作った「夫に代りて人に白蠟燭を贈る詩」でしめられているが、まず彼女が「一旦併せて其の集を焚く、以為えらく才思は婦人の事にあらずと、是れより専ら婦道を以て内を治む」であったと述べている。見たところ、編集者たちが「才婦」たちに下した脚注か、あるいは規範であったかもしれない。

劉向の足取りを追って、彼の性別倫理観念を押し広げた正史「列女伝」の作者たちでさえ、唯一劉向と呼応できなかったのは、彼らの文章では取らなかった「孽嬖」であり、これは当然ながら史書立伝の原則上肯定的な人物を多く取る筆写のスタイルと関係している。しかし『太平広記・婦人』の最後「美婦人」・「妬婦」・「妓女」は「孽嬖」の意味を意外に持っている。「才婦」が「孫氏」で結び、読者に「才思は婦人の事にあらず」を指摘し、「美婦人」は越国が呉王夫差に献上して呉国を滅ぼさせた「夷光」を前書きとして、美女が国君を「妖惑」して「國政を怠らす」という意味を明示しているようである。

男性の生命・家族調和、また家中の跡継ぎに対して等しく大きな脅威である「妬婦」、および男性双方の争いを引き起こすやもしれない「妓女」について、その「孽嬖」の性格はおのずから多言を要しない。しかし、我々が注意すべきは、『太平広記』の中で「婦人部」に「妬婦」がある以外に、その他の部類の中にも「妬婦」があり、ただ故事の記述方法が明らかに異なるという事実である。両者の違いを子細に比較することによって、我々はより編纂者が「婦人部」を設定した意図を理解できるかもしれない。

卷二百七十五「僮僕」類の「李福女奴」も、妬婦に関する故事である。李福は妻である裴氏の嫉妬心が非常に強いがために、裴氏が洗髪している時に乗じて「偽りて腹痛を言い、其の女奴を召」した。意外にも裴氏は信じ込んで「遽かに髪を盆中より出だ」し、しかもびしょ濡れの頭髮も顧みず、鞋襪も着ず裸足のまま「福の苦しむ所を問」い、しかも「極めて之れを憂い」、そうして「是れに由り藥を以て兒の溺中に投じ之れに進む」<sup>291</sup>という。このようなたばた劇は、実際には我々に善良で情が深い妬婦の一面を見せてくれる。しかし「妬婦」類の「吳宗文」は妻の嫉妬のために命を亡くした。故事に、

王蜀の吳宗文……其の家の姫僕樂妓十餘輩、皆な其れ精選なり。其の妻妬き、毎に怏怏として其の志をこころよ慍くせず。忽として一日、鼓動して朝に趨き、已に數坊を行き、忽として報じて放朝と云う、遂に密かに從者に戒め、潛かに入り、遍く之れに幸し、十數輩に至る、遂に腹に據りて卒す<sup>291</sup>。

とある。つまり、婦人部の妬婦類が強調するのは妬婦の恐ろしい場合で、これと僮僕類の「李福女奴」のどたばた劇で出てくるのでは、筆写の脈絡から見て、おのずと異なっている。同時に再び我々に注意を促すのは、「婦人部」が独立して類となったことと、その内容の分類方式とは、伝達しようとした社会的意義が含まれていることである。

#### 四. 結語

「過去」が歴史の記述を直接の頼りとして有効に還元されえないのは、女性史研究だけが持つ困難ではない。「歴史の記述」がまったく当時の「社会的現実」と同等ではありえないことを、今日の歴史学者はみな認めなければならない。「歴史の記述」そのものはもとより社会活動の一環としての現実性があるために、「歴史の記述」も自然と社会現実の影響を受けて生みだされた「選択性」を持ち、引いてはこのためにある種の社会的期待を帯びてねじ曲がってしまう。

筆記小説はそのものに真実性の問題があるために、往々資料操作上の障害を生みだす。この点に関して、社会学者がミクロな視点から、個別に質性研究を進める考え方は我々の参考となる。個別研究の意義は、実際には人と人、人とグループ、人と社会・経済・政治・文化構造の相互作用をより深く理解することにある。つまり、個別研究の目的はもともと演繹して全体に敷衍し、その他の点や面に適用することにあるのではなく、自身で問題を説明する力量・方向を持つことにある<sup>292</sup>。ここにも正しく社会史研究より転じて社会文化史を探索する意義が存在する。しかし正に研究対象が表面の具体的な社会人事より転じて背後の抽象的文化意義を追究するために、我々はより緻密にその間の手掛かりとなりうる表象を解読する必要があり、「実相」あるいは「虚像」として具有する社会的意義を弁別する一方で、なおそれが従属する社会文化の淵源を整理する必要がある。

しかし宋代の社会文化を研究し、宋代以前に書かれた故事を集めた『太平広記』を利用するならば、その流伝についてより正確な認識が求められ、そうしてようやくその用いるべき角度

や程度を確定できる。したがって本稿はただ編集者の分類という角度から、本書を劉向『列女伝』・正史「列女伝」の脈絡に放り込んで、縦軸にその歴史的位位置づけを探ったのであり、将来個別の故事内容をいかに解説するかをより一歩すすんで考えるための基礎である<sup>31)</sup>。『太平広記』の編集者はもとより喧伝しようとする理念的根拠があって、収集した故事を異なる部類に入れて、類例の配列を借りて、選定した思想文化概念を読者に伝えようとしたことが分かる。しかし、この個々の故事は編集者たちが述べんとする筋道に置かれても、故事そのものが持っていた意趣が完全に消滅したとは限らなかった。「才婦」・「美婦人」両篇で「孫氏」・「夷光」に見られる肯定的思考による配列は、結局読者が読む際にどれほどの効果を得るのか、再び推敲するに値する。テキストが編者の変更を経て提示する新知識体系と、読者がどのような態度で向き合うか、作者が予知するすべないような、編者がどのようにその作品を利用しどのような新知識体系をうちたてたのかについては、さらに多くの史料と研究によってこそ確定することができる。

## 【注】

- 1) 『太平広記』(北京:中華書局、1961年)「太平広記表」。
- 2) 錢鍾書『管錘篇』(北京:中華書局)冊二、639頁。
- 3) David Lowenthal, *The Past is a Foreign Country* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), pp.214-231.
- 4) 劉静貞『不孝子』(台北:稻鄉、1998年)2-6頁。陳弱水は唐代小説を用いて唐代士族の生活と心性、及び婦女と本家の関係を検討した。「從『唐暉』看唐代士族生活与心態的幾個方面」、『新史学』10:2(1999年7月)、1-26頁、「小説中所見的唐代婦女与本家」、『中国史研究』(韓国)20(2002年10月)、65-76頁を参照。
- 5) このことについて明代の学者胡應麟の分類に依った。『少室山房筆叢』(上海:上海書店)巻29、282頁を見よ。胡氏は「談叢、雜錄二類最易相紊、又往往兼有四家、而四家類多獨行、不可攙入二類者。至於志怪、傳奇、尤易出入、或一書之中二事並載、一事之内兩端俱存、姑舉其重而已」とも述べる。
- 6) 高彦頤『纏足—「金蓮崇拜」盛極而衰的演變』(台北:左岸、2007)はこの問題の別の一面を指摘し、氏は現代の纏足に関する研究が往々にして反纏足思想の脈絡の中で進められ、纏足史の眞の發展狀況を理解できなくなっていると強く感じている。あるいは読者の觀念を先に一掃するために、氏は『纏足』の書の中で、時間上は本来後ろの反纏足史を、時系列上前に位置する纏足史の前に配置しているのかもしれない。
- 7) 劉静貞『宋本『列女傳』的編校及其時代—文本・知識・性別』、鄧小南主編『唐宋女性與社會』(上海:上海辭書出版社、2003年)上冊、22-45頁。宋本『列女傳』の編纂者である蘇頌・曾鞏・王回などは、劉向の原本を復元することをその編纂目的としたが、実際には彼ら自身の脈絡もあった。注9も参照。
- 8) 杜德橋(Glen Dudbridge)はかつて『唐代文獻中的宗教文化研究—問題与歷程』において、歴史文獻と歴史事件の関連を検討し、志怪筆記を例に、二者が連携しようとする時に注意すべき問題とそのアプローチについて説明している。『文史知識』2003年3-4期、11-19、13-23頁。
- 9) 彼ら双方が編纂整理したテキストは現存しないが、仁宗の末年に、ほぼ同時に整理編纂を進めた三人は、実際にはそれぞれ自身の思考の脈絡があって追究することができ、それによって後世のいわゆる覆宋本と彼らの間の継承関係を明らかにすることができる。たとえば、同様に劉向『列女伝』のもとの篇卷構成を復元するといっても、蘇頌の整理はただ既存の伝七篇の形式を復元しただけだが、王回は好古によって歴史記録の原型の保存に気をつけ、劉向の原作でない故事を検出して「純列女伝」を作り、劉向の著作の本来の姿に還元しようとした。曾鞏が気をつけたのは、伝文自体の内容の校正であり、彼が気を

- 配ったのはテキストに潜む教化の目的が正確な知識を経由して表現できるかどうかであった。と同時に彼はすでに館閣に身を置いていたので、自然と蘇頌の編纂したテキストを校勘の対象とした。詳しくは劉靜貞『宋本『列女傳』的編校及其時代—文本・知識・性別』鄧小南主編『唐宋女性與社會』上冊、22—45頁を参照。蘇・曾本がわずかに繕寫を付したことは曾鞏『古列女伝目錄序』（廣文書局影同治十三年汪氏振綺堂補刊本『列女傳』に所収）を参照。
- 10) 王應麟『玉海』（京都：中文出版社）巻54、35頁。明嘉靖談愷刻本の序の中にも「六年正月奉聖旨雕印版」、「言者以廣記非後學所急、收板藏太清樓」とある。
  - 11) 中華書局本『太平廣記』の注釋體「點校說明」。また錢鍾書『管錘篇』639—641頁を見よ。富永一登『『太平廣記』の諸本について』、『広島大学文学部紀要』59、1999年。張國風『太平廣記版本考述』（北京：中華書局、2004年）6—10頁。
  - 12) 張華娟『『太平廣記』研究』（山東大學博士論文、2003年）第四章「太平廣記的分類問題」、盛莉『『太平廣記』仙類小説類目及其編纂研究』（華中師範大學博士論文、2006年）第二章第一節「太平廣記的類目特點」を参照。
  - 13) 四庫全書本と中華書局本の違いはここにある。中華書局本は「竇烈女」を題とするが、故事の内容は「奉天竇氏二女」の後に竇烈女の記事を附し、四庫全書本は「竇烈女」と「奉天竇氏二女」と分けている。張國風『試論太平廣記の版本演變』、『文獻』1994年4期によると、四庫全書本は殘宋本のやり方を復元しているという。
  - 14) 四庫本は「張揚妻」とし、中華書局本の註に「揭原作揚、據『北夢瑣言』改」とする。
  - 15) 譙國夫人洗氏のほか、中華書局本が談氏初印本により附録したもう一人の洗氏は、秦末の争亂に固く郷里を守り、趙佗に時政を陳べ兵法を論じた。この両者とも、夫に代わって出征したという意味を持っていてそうである。
  - 16) 塩卓悟は巻270収録の女性を分析して賢女・貞女・孝女・烈女に分け、彼女たちが当時の國家に求められた「忠」「孝」「貞」の特質を持ち、正史「列女伝」に採録される資格を持っていたと考えている。『訳註太平廣記婦人部』（東京：汲古書院、2004）、「解題」、39—40頁。
  - 17) 『隋書・經籍志』（中華書局点校本、以下正史はすべてこの本であり、贅言しない）巻33、982頁。
  - 18) 劉向『列女伝』に関する議論は、劉靜貞『劉向『列女傳』的性別意識』、『東吳歷史學報』5、1999年を参照。
  - 19) 『金史』の作者が「列女伝序」を書くまで、わずかに「劉向始述三代賢妃淑女」云々のうしろに「范曄始載之漢史」の一句を加えるだけであった。巻130、2797頁。
  - 20) 章學誠著、葉瑛校注『文史通義校注』（北京：中華書局、1983）巻7、「外篇二 永清縣志列女列傳序例」、767頁。
  - 21) 劉靜貞『劉向『列女傳』的性別意識』、『東吳歷史學報』5（1999年）、10—16頁。
  - 22) 章學誠『文史通義』巻7、「外篇二 永清縣志列女列傳序例」、766頁。
  - 23) 『後漢書・列女傳』巻84、2781頁、『晉書・列女傳』巻96、2507頁。
  - 24) 『北史』巻91、2994頁、『隋書』巻80、1797頁。
  - 25) 『金史』巻130、2797—2798頁、『遼史』巻170、1421頁、『舊唐書』巻193、5138頁。
  - 26) 手当たり次第調べると、巻170知人二「苗夫人」、巻193豪俠一「車中女子」、巻236奢侈一「趙飛燕」、巻240諸侯二「太真妃」、巻245談諧一「王戎妻」、巻261嚙部四「柳氏婢」、巻277夢「宋頰妻」などである。ただ注意すべきは「神仙」の外に「女仙」を立てており、あるいは人は「仙」になったのち、なお「性別」意識を維持したことを示すかもしれない。
  - 27) 劉詠聰はかつてこの問題を論じている。「“女子無才便是德”說的文化涵義』、『女性與歷史——中國傳統觀念新探』（台北：臺灣商務印書館、1995）89—103頁。また「中國傳統才德觀及清代前期女性才德論」・「清代前期關於女性應否有“才”之討論」、共に『德・才・色・權：論中國古代女性』（台北：麥田、1998）を参照。
  - 28) 『太平廣記』巻275、2171—2172頁、「李福女奴」。
  - 29) 『太平廣記』巻272、2147頁、「吳宗文」。
  - 30) 熊秉純『質性研究方法芻議—來自社會性別視角的探索』、『中國社會學』第三卷2004年、65—69頁。

31) 『太平広記』の部類の配列方法とその他の類書との比較は、歴史的な位置づけの横軸を理解する別の方法である。類書どうしを比較し、分類上からその思想・筋道を理解する研究については呉雅婷「移動的風貌—宋代旅行活動的社會文化内涵」(臺灣大學歷史研究所博士論文、2007年)第一章第一節「宋代類書編目中的「移動」」を参照。

32) 王回「古列女傳序」、「列女傳」(廣文書局影同治十三年汪氏振綺堂補刊本)巻首。

【2009年9月15日受付、10月28日受理】

## The Atmosphere of the Social Culture in Sung Dynasty: The Study of the Editing of Women Category in *Taiping Guangji*

(Extensive Records of the *Taiping* Era)

edited by LIU Jingzhen

translated by YAMAZAKI Satoshi

Before we use texts written in the Song times to reconstruct the history of Song women, we should try to detect the trends and atmosphere of the Song society during the formation period of each text. The goal of this line of inquiry is to differentiate the record of the actual life of the Song women from the depiction of ideal women according to each individual authors and compilers. This work analyzes the text of the section on women in *Taiping Guangji*, and tries to identify the guidelines of its categorization. The detailed analysis is conducted from two angles. The first one is to view it as a product of the later development of the compilation of the *Lieh-Nu-Chuan* by Liu Xiang and other *Lieh-Nu-Chuan* in Dynastic Histories, and to analyze its significance in the historical writing of the Chinese women. The second one is to decipher the messages these compilers intend to convey to their readers.

**Key words:** Song society, historical writing, *Lieh-Nu-Chuan* (*Biographies of Chinese Women*), *Taiping Guangji* (*Extensive Records of the Era Taiping*)